

左坐骨神経痛（長谷川吾朗氏症例）

男性 七八歳

主訴 左腰臀部から下肢にかけての坐骨神経痛

既往歴 二五年前盲腸手術、十五年前大腸癌手術、七、八年前尿管結石。

現病歴 一週間前、雪かきをしていて左臀部痛発症、その後左臀部から下肢にかけて鈍痛が出だして一分と立ってられないようになる。また、座っても痛みが出るため、トイレ、食事も苦痛である。夜間痛みで目を覚ます時がある。普段は横になっていると比較的楽である。

所見 「脉状」細・緊・やや尺落気味。
「火穴」両行間 (+)、両然谷 (+)、右大都 (+)
「腹診」右悸肋部 (やや+)、右中注 (+)、下腹部軟弱かつ圧迫で下肢にひびく。
当初下腹部軟弱 (小腹不仁) を「腎虚」とだけ診断、また「翳明」(++) で扁桃の弱りと診断 (下垂は診なかった)。加齢と数回の手術により体の弱りをおこし、扁桃の弱りにより毎月の畑仕事が引き金となった下肢痛と診る。

治療 「翳明」(++)、「腎虚」に対して、「扁桃・副腎処置」つまり「照海・兪府・天牖・手三里」20分留鍼。
「右中注」(+)により「右瘀血処置」。
左坐骨神経痛のため、「左坐骨処置」「左帯脈」。
治療後、腰臀部痛はなくなったが、左下肢のだる痛さが残る。

経過 四回目 (六日目) 左下腿外側の痛みが時々強く出るが、正座なら少し座っていられるようになった。「細・緊・やや尺落」。「左魚際 (やや+)」「両行間 (++)」「両翳明 (++)」。「右悸肋部 (やや+)」「左天枢 (やや+)」「右中注 (+)」「左中注 (やや+)」。「扁桃」「瘀血」処置。「行間」(++) で「肝気水穴処置」。「左天枢」で「肝実処置」。「副腎」「左坐骨処置」「左帯脈」。「尺落」で「下垂処置」。治療後足のだるさ半減する。

七回目 (十六日目) 立っても座っても楽な時が多くなってきた。夜間痛は少ない。「細・浮・やや尺落」。「両行間 (+)」「右然谷 (やや+)」。「右天枢 (やや+)」「右中注 (+)」「翳明 (+)」。長野先生の助言により「扁桃七点」の灸治療を追加し、自宅でも自分ひとりでできる所「手三里・照海」に市販の「間接灸」をしてもらう。処置は同前処置。術後結構楽になる。

十回目 (二十六日目) 大分楽になっていたが、整形外科での牽引とマッサージで痛みが悪化する。「弦・数」「両行間 (++)」「然谷 (+)」「両中注 (++)」「翳明 (+)」。同処置後痛み 1/3 に減少。

十四回目 (五十九日目) ほとんど痛みなし、2~3km 歩いても何ともない。左下腿外側に少しつっぱり感だけ。「やや浮」。「左行間 (わずか+)」「右中注 (+)」「翳明 (やや+)」。「扁桃」「瘀血」「左下垂」「左坐骨」各処置。

十五回目 (八十九日目) 一カ月間足のつっぱりもなく、痛みも全くない、快調。「やや緊」のみ。「左行間 (やや+)」。腹部圧痛なし。「翳明 (やや+)」。同前処置を行い、痛みなど全くなく、一応完治とする。

後日奥様が来院され、「すっかり元気になり、ありがとうございます。一時は一生かたわかと思っていました。」と喜んでもらいました。

考察 結果的に、扁桃の弱りと下垂による坐骨神経痛だったと考えられる。長野先生の助言の「必ず灸治療は必要だ。」との言葉どおり、自宅で間接灸ではあるが毎日行った事で、治癒に導かれたと思います。難しい症例にあたり、それを乗り越えた時、一歩前進でき自信がつけました。すごく勉強になった症例でした。

追記 この患者さんは、今でも時々思い出しますが、今読み直してみると、恥ずかしい文面です。長野式治療をはじめて3年目の症例でした。

今現在なら、もっと的確に処置ができたのではないかと思います。治療の流れは、ほぼ間違いはないと思います。

「新治療法の探究」にも「扁桃」「瘀血」の重要性、お灸の重要性がうたわれていますが、全くその通りであると、今でも毎日の治療の中心に据えています。

皆さんも経験があると思いますが、痛みが強く症状が急激な場合など、慌ててわれを見失い、アタフタと症状に目がいき対症療法に走ってしまい、結果的に治癒まで時間がかかってしまいます。おちついて体全体を良く観察をして、各疾病のバックグラウンドを良く見極めて処置を組立てることが、早く治癒に繋がるのです。